

## ガラテア人への手紙における「霊的な人びと」

阿 部 包

### 一 はじめに

初期キリスト教が一枚岩的な組織体ではなく、多様な運動をそれ自体の内に内包する集合体であることは、今日では既にわれわれの共通理解となっている。<sup>(1)</sup> そもそも何らかの宗教運動が文化背景の異なる諸地域において展開するには、運動それ自体が多様性を許容するものとならねばならぬはずで、初期キリスト教だけが例外という訳にはいかない。そして、初期キリスト教全体からパウロ一人に目を移してみても、そこに現われて来るのはやはり多様性であり矛盾であるように思われる。大雑把に言えば、従来はこれを、表面的には、あるいは個々の点に関しては、矛盾があるように見えるが、根本的には、あるいは全体として見れば、矛盾と言えらるほどのものではない、という具合に説明するのが一般的だったのではなからうか。

確かに、パウロの全体像を統一的に把握するという課題それ自体は、研究者にとって極めて魅惑的であるのみならず、同時に必要な作業でさえあるだろう。だが例えば、「パウロ神学の中心は信仰義認論である」という、彼の手紙から(正當にも)抽出された一つの理解を、固定した枠組として逆に彼の手紙に嵌め込み、この解釈枠から逸脱する個々の用語・句等を外に排除した上で、その枠の内部で理解された限りにおけるパウロの「全体像」をすんなり受け

容れる姿勢がもしあるとするならば、それに対して疑問が差し挟まれるのは当然であろう。中心と全体像とは同一ではないし、彼が伝道した地域の社会・文化的背景の相違もある。また、彼の神学の展開に影響を与えた競合する伝道者—いわゆる反対者—の宣教内容・神学の相違も直ちに想起されるであろう。

筆者は、さしあたり、パウロという宗教思想家を、矛盾・多様性をそのまま矛盾・多様性として自らの内に抱え込んでいる人物、そしてその限りでのみ彼の「全体」が考えられるような存在として把えるところから出発する。もし、パウロにこのような矛盾・多様性があるならば、相互の調停を図る前に先ずありのままの姿を見据える必要があるのではないかと思われる。

小論は、このような前理解の下に、一つのケースとしてガラテア六・一に現われる「霊的な人びと」(οἱ πνευματικοί) という語を取り上げようとするものである。(2) というのは、コリントの教会を舞台にしたいわゆる「霊的熱狂主義」および「霊的熱狂主義者」については、従来大きな関心が寄せられてきたし、わが国でも既にいくつかの論文が書かれているが、われわれの箇所はこの名詞形については、従来、注解書の中で論述を除けば、主題的な論及があまりなされていないように思われるからである。少なくとも、最近の研究に限る限りそのように言えるであろうが、これは何故であろうか。研究者が、一様にこの語に主題とするほどの重要性を認めないのかもしれないが、この語は、パウロにおけるキリスト者理解のある側面を考察する上でも、何らかの示唆を与えるものと思われる。すなわち、彼は通常キリスト者の呼称として、「聖なる人びと(聖徒)」、「召された人びと」等を用いるが、私見(4)によれば、「霊的な人びと」もキリスト者の呼称となり得る可能性を持っていたと思われる。

ともかく、小論は、この語をめぐる問題を整理しながら、一つの解釈の可能性を提示することを目的とする。その際、同時に、ガラテアの信徒たちの前史と、この手紙が書かれた当時の彼らの状況との分析が必要であろう。

## 二 信徒たちの前史

ガラテアの信徒は異邦人キリスト者であるが、彼らの前史を推測するための資料として、われわれはガラテア四・三、八、九を用いる。この箇所にも当然問題はあつた。何故なら、パウロの手紙から知られるのは、彼が入手した限られた量の情報とそれに基づく彼の状況把握であり、それはいわば彼の理解・解釈に過ぎないからである。従つて歴史的に正確な知見をそこから導き出すことは殆んど不可能に近いと言ふべきかもしれない。とはいへ、第二伝道旅行の際のガラテアにおける福音宣教が、彼自身の病気を契機としたものであり、その際彼が回復まで滞在を延長したことをわれわれは知つて<sup>(5)</sup>いる。それ故、ある程度の推測は許されるであらう。

先ず、四・八を取り上げよう。ここでは彼らの前史が、「ところで、当時あなたたちは神を知らずに、本性上神ではない神々に隷属してました」と規定されている。前半部(八a)は、単にヘレニズムユダヤ教における異邦人理解の反映と考えられないこともない。というのも、ここでは唯一神教のモチーフが異教に對抗して強調され、「神を知る」ことが同時に異教の神々を神ならぬものとして排除することを意味したからである。<sup>(6)</sup>こうした理解をパウロがここで踏襲しているとすれば、八aはガラテアの信徒たちが異邦人であつたことを示しているに過ぎず、それ以上の実質的な内容をこのこの箇所から読み取る必要はないであらう。

後半部(八b)も今述べた理解に照らせば、八aとの内容上の類似が見られるが、実際の状況に対する評価という側面が強いと言えよう。ここでは、洗礼を境にして、自由な「今」と隷属状態にあつた「当時」とが対照されている。ここに現われる語と同根の語が、パウロにおいては自由人・奴隸という社会関係を表わす概念としても用いら

る例もある(一コリント七・二一、一二・一三、ガラテア三・二八など)が、ここでは、より本質的な人間の存在様式が考えられているのと言うまでもない。そして、この隷属という存在様式が異教と律法とを同一地平に立たせるのである。異教については、既に見たように「神を知らない」という規定が与えられ、律法については、「信仰が来る前」(ガラテア三・二三)という規定が与えられている。

八bの「本性上神ではない神々」<sup>(?)</sup>は九節において、「あの無力で貧弱な諸力」と等置されている。さらに、後者は微妙なずれを含みつつも三節の「世界の諸力」と等置されていると考えられる。すべてに共通するのは、人間を隷属させるという性格である。

さて、先に引用した八節の「当時」(τοτε *tau*)の状況描写に続けて、九節では明瞭な対照の下に「今」(νυν *nu*)が描き出される。すなわち、「しかし、今や神を知っているのに、いやむしろ神に知られているのに、あなたたちは、どうして再び、あの無力で貧弱な諸力(*τα ἀσθενῆ καὶ πτωχὰ δυνάμεις*)に逆戻りし、それらにもう一度また隷属したがるのですか」と問われている。このように、ガラテアの信徒たちが陥っている状況を、パウロは一種の退行現象として扱っている。こうした扱え方ができる背景には、四・三の次のような理解がある。それは、「このように、わたしたちも子供だったときは、世界の諸力(*τὰ δυνάμεις τοῦ κόσμου*)<sup>(8)</sup>の下に隷属させられていました」というものである。この場合、「わたしたち」は、ユダヤ人、異邦人の別なくキリスト者全体を指すが、同時にそれは、「(律法と割礼を守る)ユダヤ人といえども、(異邦人である)あなたたちともども世界の諸力の奴隷だったのだ」というニュアンスを、われわれの文脈の中では持っているのではあるまいか。この解釈は、「わたしたちも(*καὶ ἡμεῖς*)」の「も」に基づいている。すなわち、四・三aは主として、ユダヤ人に関するものであり、それが四・三bと結びつけられることによって、ユダヤ人も律法の下にある限り異邦人同然なのだ、という発言になっていると思われる

る。

パウロは、そう言うことによって、ユダヤ教の律法と割礼の支配下に入りつつある現在のガラテアの信徒に向けて、それがかつての異教への退行に過ぎないことを気づかせようとする。こう理解すれば、彼が四・九bで、「どうして再び逆戻りし……もう一度また隷属したがるのですか」という形で再度奴隷状態に立ち帰る、という点を強調している理由も一層明瞭になってくるであろう。この九bでは、「諸力」について「世界の」という属格規定が欠落する代りに「無力で貧弱な」という形容詞が付加されている。この形容は、ガラテアの信徒を説得するためのレトリック的色彩が濃いと思われる。<sup>(11)</sup>

ところで、問題は、パウロによって本性上神ではない異教の神々と同定されている「世界の諸力」である。実は、これには様々な訳語が当てられている。便宜上二つに分けて考えると、「宇宙の諸力」と解するか、「この世の初歩的教え」と解するか、である。<sup>(12)</sup> 現在のところ、前者が一応多数派を占める。しかし、最近後者を強力に主張する研究が現われたので、それを検討しながら論を進めることにしよう。

それは、パウロにおける力あるものに関する研究を纏めたW・カーの説である。<sup>(13)</sup> 彼の論証を支えるのは、パウロが活動した小アジア世界の文化的・社会的・政治的・宗教的状況の分析である。方法的には、B・M・メッツガーに従いつつ、<sup>(14)</sup> 彼は、当時(後三〇―六〇年)の小アジアは安定した平和な時代であり、その点で一世紀の終わり以降の時代とは異なるとする。すなわち、密儀宗教や占星術が隆盛を見るのは主として一世紀の終わり以降であって、「力あるもの」を悪霊等と結びつけて解釈しうるのはこの時代であって、パウロの時代ではない、<sup>(15)</sup> というのである。

こうした前提に立って、彼は、*τὰ στοιχεία τοῦ κόσμου* についても解釈を施している。<sup>(16)</sup> 彼によれば、「ストイケイ

ア」に関して、「初歩的な観念」(elementary ideas)と「宇宙の構成要素」(elements of the universe)という意味はパウロの時代に既に定着していたが、星辰崇拜と関わる「霊的存在」(spiritual bodies) という意味は確認できないという。すなわち、彼は、「ストイケイア」が天使や星辰界の諸霊を含意しうるようになるのは、パウロ後の展開である、とするのである<sup>(17)</sup>。

このように、彼は「ストイケイア」については「初歩的な観念」と「宇宙の構成要素」とを可能性として認めた上で、次いで、パウロにおける「コスモス」の意味の吟味に移る。彼の主張を簡単に要約すると、大抵の場合パウロは「コスモス」を「人間の世界」の意味で用いるが、それを専ら悪しきものと規定している訳ではないので、「ストイケイア」の規定詞として「コスモス」が付加されたからといって、「悪しき諸力」の意味が含まれるとするのは単純にすぎる、というものである。

結局、彼は問題の句を「この世(＝人間の世界)の初歩的な観念(教え)」と解釈する。この結論は、「コスモス」を「人間の世界」と理解することからして、いわば出るべくして出た当然の解釈と言うことができよう。

しかし、W・カーの主張にもかかわらず、パウロにおける「コスモス」がすべて「この世(＝人間の世界)」を意味する訳ではない。例を上げて検討してみよう。

ローマー・二〇……「世界創造以来」(ἀπὸ κτίσεως κόσμου)。この場合の「コスモス」は全被造物を包含する全世界、つまり「宇宙」の意味における世界である。したがって、星辰をも含む概念として理解することも可能だと思われる。

一コリント四・九b……「こうして、わたしたちは、世界、つまり天使と人間の (τῶν κόσμου καὶ ἀγγέλων καὶ ἀνθρώπων) 晒し物になったのです。」このように、世界はその中に天使と人間とを含んでいる。

一コリント八・四b……「世界にはどんな偶像も、また、唯一の神以外のどんな神も存在しないということを、わたしたちは知っています。」この場合の「世界」は、この箇所直後の八・五a「たとえ、天上にせよ、地上にせよ、神々と呼ばれているものがあるとしても」から判断されるであろう。すなわち、世界は、天と地とを含む概念として用いられていると考えられよう。<sup>(18)</sup>

このように見えてくると、パウロにおける「コスモス」概念を「人間の世界」に限定するのは行き過ぎと言うべきであろう。私見によれば、彼の「コスモス」概念を理解するにはむしろローマ八・三八―三九に示されている内容が参照されるべきではないかと思われる。そこではこう述べられている。

「わたしたちは確信しています。死も生命も、天使も支配するものも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、高い所にあるものも、深い所にあるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」

パウロにおける「コスモス」は、この発言の中で否定的に評価されている一切のものを包含する概念として把握されていたのではないかと思われる。いわゆる「人間の世界」としてのこの世だけが否定されるのではなく、被造物である限りにおける世界が、しかも神と対立する限りにおけるその世界が、否定されるのであろう。

したがって、ガラテア四・三の問題の句を「この世（＝人間の世界）の初歩的な観念（教え）」と解さねばならぬ必然性はない。むしろ、それは、世界空間の中に存在しつつ、世界を規定する要素をさし、その要素は、神的權威を持つものとして「神々」と呼ばれていたのである。唯一の神を知らない異邦人にとって、自己の安全を確保するためには、この「神々」に隷属する以外に道はないであろう。<sup>(19)</sup>

われわれが「世界の諸力」と解するのは、宇宙論と言えるほどの展開をそこに見出さないからであり、「コスモス」

は、星辰界をも含みはするが、それを否定的に把えていることが明瞭だからである。<sup>(20)</sup>

ガラテアの信徒たちの前史をめぐる問題に関しては、以上のように理解することができるであろう。

### 三 状 況

次に、信徒たちの状況を簡単に考察しておきたい。<sup>(21)</sup>

パウロによってガラテアに福音が宣べ伝えられた後、ユダヤ主義的な競合者がパウロによって基礎づけられた教会を舞台にして、同様に福音宣教を行なう。その際、彼ら競合する伝道者の主張は、「肉による完成」を中心とするものであったように思われる。すなわち、ガラテア三・三bでパウロは、「霊によって始めたのに、今肉によって完成しようというんですか」と信徒たちに向かって鋭い問いを投げつけている。勿論、この場合の「肉によって」は、パウロによる説明句であろうが、競合者に由来する可能性も否定しきれない。<sup>(22)</sup> 彼らの要求は、割礼受領と律法遵守であり、それによって救済が最終的に完成すると説いたのである。彼らの主張によれば、この完成が齎すものは「アブラハムの子」(四・七) すなわち、約束の受領者の身分である。つまり、異邦人の信徒は、洗礼を通して霊を受けただけでは不十分なのであって、割礼を受領して改宗者となることによって完成に至るといふ訳である。ここには、少なくとも割礼(と律法)に関する限り、ある程度厳格なユダヤ主義路線が見出されるであろう。

パウロ側の判断によれば、彼らの活動は「扇動」に他ならないし<sup>(23)</sup>、彼らが宣伝した「福音」は「ほかの福音」に過ぎなかった(一・一六)。とはいえ、彼らの説得工作がかなり功を奏しつつあったことは、ガラテア人への手紙全体の調子から判断して誤りはないであろう。



ガラテアの教会がパウロの第二伝道旅行の際に彼自身によって基礎づけられたことは既に述べたが、その時の福音は十字架につけられたイエス・キリストであった。その説教によって信徒となった人びとが、律法から自由な福音を既にそこに見出していかどうかは直ちに明らかではないが、少なくともパウロ自身にとっては、キリストの十字架と律法から自由な福音とが相即不離な関係にあることは、ガラテア一・六の次の発言からも十分窺われるであろう。「あなたたちをキリストの恵みに召して下さった方から、あなたたちがこんなにも早く、ほかの福音に移って行こうとしていることに、わたしは驚き入っています。」

このように、自由の福音から「ほかの福音」への移行の驚くばかりの速さが、この手紙の執筆動機の一つである。異邦人であるガラテアの信徒たちにとって、この自由は何よりもまず、あの「世界の諸力」としての「本性上神ではない神々」からの自由であるはずであった。パウロにしてみれば、靈における自由の先による完成などないのである。しかしながら、こうした事態を引き起こす原因の一端は、あるいはパウロ自身の宣教方針にあったと考えることもできよう。<sup>(24)</sup>

いずれにせよ、ガラテアの信徒たちの間に生じている律法と割礼への隷属という状況を、パウロは、退行現象と把握し、三・一では彼らを愚か者呼ばわりさえしている。そして、「アブラハムの子」という主張に対しては、「アブラハムは神を信じ、その結果義と認められた」(三・六)と論拠を提示して、信仰に基づくこそアブラハムの子であり、信仰の人アブラハムと共に祝福されると主張する。<sup>(25)</sup>

パウロは、これを含めた一連の主張によって新しい視点を与えている。すなわち、信徒たちには見えていない対立関係を顕にする視点である。四・一二―一四から明らかな通り、ガラテアの信徒たちは、当時からいわば心優しい人びとである。これは、相手がパウロだからという訳ではない。信徒となった彼らは、競合する伝道者をも同様に快く

受け入れたであろう。もし、伝道者が推薦状を携えていたとすれば、なおさらである。<sup>(26)</sup> それによって彼らの「福音」も速やかに浸透しようというものである。しかも、彼らは、パウロ批判もせず、彼の路線に沿ってその福音を完成するのだと主張したとすれば、そこに生じるであろう事態は既に明白であろう。信徒たちは、霊から肉への移行を一本の道と解したであろうし、律法と割礼をも福音（信仰）の一側面と見做したであろう。パウロは、この状況に福音の危機を感じ取り、霊と肉との対立、律法と福音（信仰）との対立を論証するのである。

#### 四 霊的な人びと

この手紙が執筆された当時の状況は、おおよそ以上のようなものだと思われるが、先に指摘した対立関係の神学的な論証を、パウロは三―四章において創世記、レビ記、申命記、イザヤ書、ハバクク書の引用を駆使して行なっている。そして、その後、倫理的勧告に移るのであるが（五―六章）、本章の問題はこの部分に属する。

さて、問題の句は、この部分の後半部六・一に、次のような形で現われる。

「兄弟のみなさん、もし誰かが過ちを犯しているのを見つかったならば、あなたたち霊的な人びとは (*friends of the truth*)、あなたも誘惑されないように自分自身気をつけながら、このような人を柔和な心で正しなさい。」

この中で「あなたたち」と呼ばれている「霊的な人びと」は何を意味するのであるか。第一に問題となるのは、この語がガラテアの信徒全体を指すのか、あるいは彼らの中の特定のグループを指すのか、というものである。ここで注目したいのは、「霊的な人びと」と「あなたたち」との等置である。したがって、「あなたたち」の用法が判断の一つの鍵となるであろう。この人称代名詞は、この手紙全体を通じて四一回使用されているが、何らかの特定のグ

グループを指して用いられていると思われる箇所は見当たらない。さらに、われわれの箇所で用いられている「兄弟のみなさん」(τίθεταί) という呼称形が、他の六箇所の用例と同様に<sup>(27)</sup>ここでも、序文において(一・二)この手紙の宛先とされているガラテアの諸教会(の信徒全体)に対するものであることも、「霊的な人びと」という語と特定のグループとの結びつきを否定する根拠になるであろう。<sup>(28)</sup>それ故、「霊的な人びと」は、教会内の特定のグループではなく、ガラテアの信徒全体を指す概念であろう。

第二に、この語が信徒たちの自称か否かという問題がある。次にこれについて考察しよう。

自称説の根拠は、三・二―五、四・六、である。三・三は既に引用したので省くこととし、しかも三・二と三・五は内容上重複する部分が極めて多いので、さしあたり、中心的な内容を示す三・二bを見ればよい。ここでは、「あなたたちは、律法のわざによって霊を受けたのか、それとも信仰の説教によってか」と述べられている。自称説は、ここから、信徒たちが洗礼を通して霊を授けられ、その時以来「霊的な人(びと)」と称している、という理解を得るのである。最近では、この解釈がかなり有力になりつつあるように思われる。一九七〇年以降に著された注解書等は、ほぼ一致してこの立場をとっているようである。<sup>(29)</sup>

さて、この説を受け入れる場合には、信徒たちは自己の前史を「肉的な人」として扱え返していなければならないことになる。パウロがこの手紙において、肉・律法・割礼の問題をこれほどまでに論じなければならなかったのは、ユダヤ主義的な競合者の活動によって福音の危機が生じたからである。当然ながら、この手紙は危機以降の、危機へ向けての手紙である。二章で論じたことから推論する限り、信徒たちは「本性上神ではない神々」から解放されたのであって、「肉」からではない。「肉」と規定したのはパウロ自身であろう。さらに、かつて彼らの「神々」であった「世界の諸力」とユダヤ教の歳時暦とを同等に扱った(ガラテア四・九―一〇)のも、パウロであって彼らで

はない。もし、第二伝道旅行の際すでに、ユダヤ教の律法と割礼は異教と同様に「肉」としての性格を持つ、と彼が説教をしていたとすれば、競合者の扇動も徒勞に終わっていたであろう。可能性としては、パウロがガラテアの人びとの「神々」について、「本性上神ではない」としてその神性を否定すると同時に、彼らの生き方・存在様式そのものも実は「肉」的なのだ、と説得したと考えられる。<sup>(30)</sup> こうして、彼らは、信仰の視点から自分たちの前史を「肉」的と捉え返すことになる。

われわれは、自称説を全面的に拒否するつもりはない。ただ、この「靈的な人びと」という呼称が彼らの自称として確立するに際して、彼らの前史との何らかの連続性があるのではないか、と疑問を呈しているに過ぎない。先に、二章において前史を扱うに当たって、敢えて指摘せずに通り過ぎたのであるが、「ストイケイア」の解釈には今一つの側面がある。それは、この語を「靈」として把える解釈である。この解釈に従えば、ガラテア四・三の語は「宇宙の諸靈」ないし「宇宙の構成要素である諸靈」という意味になる。<sup>(31)</sup> 勿論 *tá stoyeía* = *tá pnyhaktá* となる訳はない。しかしながら、星辰界との関連と同様に、もし「ストイケイア」に靈的性格を認めることができるのであれば、そのような靈的性格を帯びた「神々」を崇拜し自己の安全を確保していた人びとも、何らかの靈的性格を持っていたと推測することができよう。この解釈が可能だとしても、「靈的な人びと」という語が、そのままの形で、ガラテアの人びとの前史における自称でもあったと推論してしまうのは強引に過ぎるかもしれない。<sup>(32)</sup> しかし、彼らの前史にも何らかの靈的性格があったと仮定した方が、後にガラテアの信徒たちだけに「靈的な人びと」という自称が確立したことを理解し易くするのではあるまいか。

すなわち、彼ら信徒たちは、洗礼を媒介にして、自らの「靈的性格」がいわば「本性上の靈的性格」に取って替わられたと理解したことになり、それによって「靈的な人びと」という呼称が自称として確立されたことになるであろう。

う。

以上、われわれは若干の修正を提案しつつ、自称説をひとまず受け入れておくことにしよう。しかし二者択一があまり意味がないことも事実である。

それでは、六・一全体あるいは前後の文脈との関連の中で、この「靈的な人びと」はいかなる意味を付与されているであろうか。

パウロは五・一三以下で、肉と靈との対立を明示し、同時に「肉のわざ」として悪徳の目録（姦淫、不潔、みだら、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、利己心、抗争、分派、泥酔、酒宴、その他これに類したもろもろのこと）を、また、「靈の実」として徳の目録（愛、喜び、平安、寛容、思いやり、善意、誠実、柔和、自制）を、それぞれ列挙している。そして、これらの目録を含む一六―二六節においては、「靈によって導かれること」が三度に亘って強調されている。すなわち、一六節（「要するに、靈に導かれて歩みなさい。そうすれば肉の欲を満たすことはないでしょう」）、一八節（「しかし、あなたたちは靈によって導かれているなら、律法の下にはいないのです」）、二五節（「わたしたちは、靈に導かれて生きているなら、同じく靈に導かれる通り歩みましょう」）がそうである。

ここで言われているのは、ニュアンスの相違はあるものの、実際の日常生活の具体的な場面で靈の導きに従って生きよ、という勧告である。そして、こうした勧告が三度も繰り返される根拠は二四節に示されている。すなわち、キリスト者は肉をあらゆる欲と共<sup>(34)</sup>に十字架につけた、という指摘である。したがって、五・一三以下の部分は、勧告を交えつつ、キリスト者の存在様式を、肉と対立したものととして、「靈によって導かれて」生きる存在として規定している箇所である、と言うことができるであろう。

六・一以下は、この部分を受けた発言である。しかも、六・一は「柔和な心で正しなさい」という命令の「柔和」

によって、五・二二の「霊の実」と直結する。そして、五・二四でキリスト者についていわば客観的に言及し、それに続いて二五節において「わたしたち」という形で、パウロはガラテアの信徒をも巻き込みながら、霊に導かれて歩むことを勧告する訳である。それから二六節を挟んで、六・一の「あなたたち霊的な人びとは……」というわれわれの箇所へと続いているのである。

したがって、おそらくパウロは、五・一三以下で論証したキリスト者の「霊に導かれて」生きる存在様式を、ガラテアの信徒たちが自称としていた「霊的な人びと」という語に託していると考えられる。<sup>(35)</sup>したがって、この語は単にキリスト者のあり方を指しているだけであって「円熟したキリスト者」<sup>(36)</sup>と理解する必要はないであろう。

## 五 おわりに

以上、われわれは、ガラテア六・一に現われる「霊的な人びと」という語について、ガラテアの信徒の前史および彼らの状況に関する分析を手掛かりにしつつ考察してきた。そこから得られたことを改めて仮説的に述べるならば、「霊的な人びと」という語は信徒たちの自称であるが、そこには前史との何らかの連続性が推測される。そしてパウロは、霊と肉との対立関係に基づく自らのキリスト者理解と対応する性格をその語に見出し、キリスト者という意味を託してその語を用いた。

最後に、この語の孕む問題性を若干指摘することを以て小論を閉じたいと思う。

まず、この語は、キリスト者の自己理解としてはかなりの包括性を持つものだと思われる。しかし、同時にそれは、常に対立概念である「肉」を必要とする限りで、「召された人びと」、「聖なる人びと」等よりも限定された使用

範囲しか持ちえなかったのではないか。さらに、獲得された性質と解されうる概念であるので、神あるいはキリストとの関係が不明瞭になる恐れもあるであろう。また、この語は、従来グノーシス主義と呼ばれてきた思想を担っていたグループ<sup>(37)</sup>とキリスト者との境界線を曖昧にしうるであろう。おそらく、このような理由の故に、この語は、キリスト者の自称としては、後退して行かざるをえなかったであろうと思われる。

注

(1) この方面の先駆的業績としては、W. Bauer, *Rechtgläubigkeit und Ketzeri im ältesten Christentum*, Neudruck (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1964) があつた。また、J. M. Robinson and H. Koester, *Trajectories through Early Christianity* (Philadelphia: Fortress Press, 1971)。加山久夫訳『初期キリスト教の思想的軌跡』新教出版社、昭和五〇年、も基本的文献であり、既に古典的位置を占めていると言えよう。

(2) 勿論、そうすることによってパウロの矛盾・多様性が明瞭に浮かび上がるというのではない。他の側面と比較するための手掛りが得られるのである。

(3) ここでは代表的なものを二点あげておく。青野太潮「第Ⅱコリント五章1—10節に於けるパウロと彼の論敵の思想について」(『聖書の思想・歴史・言語』聖書学論集9、山本書店、一九七二年)、三六九—三八六ページ。荒井猷「第Ⅰコリントにおけるパウロの論敵の思想とグノーシス主義の問題」(同書)、三八七—四〇一ページ。

(4) パウロは、当時一般に普及していた手紙形式に則って、書き出しの部分に宛先教会の信徒たちに挨拶を記すが、そこに現われるのが与格形の「聖なる人びと」(ἀγιοί)、「召された人びと」(καλητός)である。他に「神に愛された人びと」「神の教会」、「キリスト・イエスにおいて聖とされた人びと」等の呼称がある。さらに、「兄弟のみなさん」(ἀδελφοί)という呼称も手紙の中にならび出て来る。

(5) ガラテアの教会の創設と第二伝道旅行との関連については、使徒行伝一六・六、ガラテア四・一三一—一四を参照。その時の福音宣教については、同三・一を参照。なお、第二伝道旅行全般については、佐竹明『使徒パウロの伝道にかけた生涯』日本放送出版協会、昭和五六年、一六六—一九三ページ。

(9) cf. R. Bultmann, "γυμνάσια. ἄρ.α.", in *TDNT* (= *Theological Dictionary of the New Testament*, 10 vols., ed. by G. Kittel and G. Friedrich, ET by G. W. Bromiley, Grand Rapids: WM. B. Eerdmans Publishing Co., 1964—1976), vol. 1, p. 702. なお「神を知らなむ」については E. Stauffer, "θεός" in *TDNT* vol. 3, p. 100. ならびに佐竹明『ガラテア人への手紙』新教出版社、昭和四九年、三八—三九頁を参照。さらにユダヤ教の異教理解一般については H. Strack und P. Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*, Bd. 3, 6. Aufl. (München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung 1975), S. 48—60. を参照。そこには Engel, Dämonen, verstorbene Menschen, Nichtse 等々とういふ理解がそれぞれ豊富な典故と共に解説されている。

(7) この場合の「本性上」(φύσει)とういふ用語については H. D. Betz, *A Commentary on Paul's Letter to the Churches in Galatia* (Hermeneia) (Philadelphia: Fortress Press, 1979), pp. 214 f. ベツは「エウクレイズムとの関連を解説を加えている。すなわち「神的存在」には「本性上(現実的に)」そうであるものと、「人間のしきたりによって」(θεσε)そう見做されているものとの二種類あり、前者は太陽、月、星等の星辰界の諸霊を指す。このような二種類の神的存在をめぐる考えは、パウロ以前既にヘレニズムユダヤ教によって、対多神教闘争に應用されていた。詳しい文献はベツを見よ。

(8) この *τροφεα* といふ単語は、新約聖書の中ではそれほど一般的なものではない。ガラテア四・三・九、コロサイ二・八、二〇、*κνβλ*五・一二、*κνβλ*テロ三・一〇、一一に出る。「初歩的な観念(知識)」を明瞭に指し示しているのは、*κνβλ*五・一二のみである。

(9) 佐竹明、前掲書、三五八—三六〇頁。

(10) 四・三の「子供だったとき」は、律法の支配下にある状態を指すと考えられる。三・二四に、「律法はキリスト(が来る)までの養育係だった」とある。子供にとって養育係はいわば支配者であり、成人に達すると解放される。そこで二五節「しかし、信仰が来たので、わたしたちはもはや養育係の下にはいりません」となる。信仰はキリストという現実である。

(11) この「無力で貧弱な」という形容は、ユダヤ教が偶像を揶揄嘲弄する際に常用する *τοπος* だと言われている。cf. R. Dabelstein, *Die Beurteilung der 'Heiden' bei Paulus* (Frankfurt a. M.: Verlag Peter D. Lang, 1981), S. 64; C. Bussmann, *Themen der paulinischen Missionspredigt auf dem Hintergrund der spätjüdisch-hellenistischen Missions-*



- (12) *literatur* (Bern/Frankfurt a. M.: Herbert Lang/Peter Lang, 1975), S. 61—74.
- (13) 日本語訳の中で、「宇宙の諸力」としてゐるのは佐竹明訳である。佐竹明、前掲書。フランシスコ会聖書研究所訳は、「宇宙の構成にたすなむる諸靈」とする。『新約聖書』中央出版社、昭和五四年。外国語訳では、H・シュリーア「世界の構成要素である諸力」(die elementaren Kräfte der Welt), H. Schlier, *Der Brief an die Galater* (Meyers Komm., 7) 5. Aufl. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1971), H・D・ベック「世界の構成要素」(the elements of the world), H. D. Betz, op. cit. H・ムスナー「世界の構成要素」(die Weltelemente), F. Mulner, *Der Galaterbrief* (Herders Komm., 9), 3. Aufl. (Freiburg-Basel-Wien: Herder, 1977), などがある。「この世の初歩的な觀念(教義)」と解するものは、W・カーである。W. Carr, *Angels and Principalities. The Background, Meaning and Development of the Pauline Phrase 'hai archai kai hai exousiai'* (Society for New Testament Studies, Mon. Ser. 42, Cambridge: Cambridge University Press, 1981), pp. 72 ff. 因みに「フランシスコ会聖書研究所の分冊は」「この世の幼稚なきまじり」としてゐた。『聖書—パウロ書簡1篇(ローマ・ガラテア)—』中央出版社、昭和四八年。
- (14) W. Carr, op. cit., pp. 72 ff.
- (15) B. M. Metzger, "Considerations of Methodology in the Study of the Mystery Religions and Early Christianity," *Harvard Theological Review* 48, 1955, pp. 1—20.
- (16) cf. W. Carr, op. cit., pp. 10—24. 全般的な傾向としては、おそろしく言えると思われる。しかし、政治的に平穏な時代というのは、不安要素が極く一部分に局所化しているにすぎない。そこでは密儀宗教や占星術は勿論表面化することはないかもしれない。しかし、底辺で「くすぶる」であろう。政治的な平穏に、見せかけの平和を目敏く見抜くのは、何も現代人の専売特許ではなからう。実際、パウロ自身も、一テサロニケ五・三で「人びとが『平和だ、安全だ』と言っているまさにその時に、まるで妊婦に陣痛が始まる時のように、彼らに突然破滅が襲いかかり、絶対逃れることはできない」と述べてゐる。
- (17) W. Carr, op. cit., pp. 72—77.
- (18) *Ibid.*, pp. 72 f.
- (19) 本文に上げた例の他に「一コリント二・一二、六・二(二回)」、ガラテア一・四、六・一四(二回)に現われる「ユスモス」の意味に関しては、再考の余地があるように思われる。すなわち、「人間の世界」よりもはるかに広い概念

として用いられているように思われるのである。なお、パウロの真正の手紙と一般に認められてはいないが、コロサイ二・八、二〇にも、われわれの箇所の句と同一の句が見られる。

(19) H. Schlier, a. a. O. S. 202.

(20) 「ストイケイア」が星辰の意味を含みうる可能性については、佐竹明、前掲書、三五九—三六〇ページ、注4、および H. Schlier, a. a. O. S. 192. 参照。文献的にこの意味がパウロ以前に明瞭な形では確認できない点は、W・カーの指摘する通りであろうが、それにもかかわらずわれわれは、パウロ外資料によつてのみパウロを理解しようとする立場には若干の疑問を感じるのである。確実に言いうるのは、パウロ以前の文献には確認できない、という点までである。

(21) これについては、いくらか詳しく論じたことがあるので、それを参照されたい。拙稿「キリストの律法を全うせよ——ガラテア六・二の解釈をめぐって」（北海道基督教学会『基督教』第一六号、一九八一年）一一八ページ。その他諸注解書をも参照。

(22) 佐竹明、前掲書、一五四—一五五ページ。および二五五ページ注1に上げられている文献、とくに R. Jewett, "The Agitators and the Galatian Congregation," *New Testament Studies*, 17, 1971, pp. 198—212, esp. 206 f. を参照。なお、「競合者」(Konkurrenten) という用語についで、前掲拙稿では G・タイセンのものとしたが (一五五ページ注(1))、彼以前に使用例がない訳では勿論ならぬ。例えば D. Georgi, *Die Gegner des Paulus im 2. Korintherbrief. Studien zur religiösen Propaganda in der Spätantike* (WMANT Bd. 11, Neukirchen: Neukirchener Verlag, 1964), S. 187 ff. 但し、ゲオルギの場合には、むしろ「競合」(Konkurrenz) という関係の方が前面に出る。

(23) この箇所、パウロは割礼を宣伝する扇動者に「あなたたちを扇動する者どもは、いっそ自ら去勢しちまうがいいのです」と皮肉まじりに罵声を浴せるが、この背後には申命記二三・一二「去勢され(て陰莖を切られ)た男子は主の会衆に加わってはならない」(日本聖書協会訳では二三・一)がある。つまり、パウロは、ユダヤ主義的な扇動者は教会の構成員としての資格を持たない、と暗に主張しているのであろう。なお彼は、序文において、二度に亘つて彼らを呪っている。

(24) 彼の宣教方針の枠組あるいは綱領とも言うべきものについては、一コリント九・一九—二二を参照。それによれば、「ユダヤ人に対してはユダヤ人のように、律法のない者に対しては律法のない者のようになつた」とある。すなわち、宣教対象に応じて、宣教内容の強調点にもある程度の変差が予想されるのである。この点を顧慮すれば、異邦人であるガラテアの人びとに対する福音宣教において、当初は律法問題が少なくとも主題的には取り上げられなかったということも考えら

- (25) れるかもしれない。佐竹明『使徒パウロ』一八八—一九〇ページ参照。  
論拠は創世記一五・六からの引用。扇動者が創世記の記述を論拠としたので、おそらくは対抗意識も手伝って同じ創世記から論拠を引いたのであろう。同じ句は、後にローマ四・三でも用いられる。なお、佐竹明『ガラテア』二二六〇—二七九ページ参照。
- (26) 初期キリスト教において、伝道者が推薦状を携える場合が珍しくないことは、二コリント三・一—二におけるパウロの発言の仕方からも窺える。さらにローマ一六・一—二、使徒行伝一八・二七も参照。
- (27) ガラテア一・一一・三—一五・四—一二・四—二八・五—一三・六—一八。
- (28) R. Jewett, *op. cit.*, p. 209.
- (29) 自称と解する者は、例え<sup>ば</sup> H. Lietzmann, *An die Galater* (HNT, 10), 4. Aufl. (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1971); H. Schlier, a. a. O.; R. Jewett, *op. cit.*; F. Mulner, a. a. O.; H. D. Betz, *op. cit.*; 佐竹明「前掲書」などがあ<sup>る</sup>。自称説をとらぬ者については、佐竹明「前掲書」五五五ページ、注3を見よ。
- (30) ここでは、一コリント二・一四、三・三—四との類比において理解できると思われる。そこでは、この世的な生を営む「自然的な人間」(*φυσικὸς ἄνθρωπος*)が「肉的」(*σαρκικός*)と見做されている。
- (31) cf. J. J. Gunther, *St. Paul's Opponents and their Background. A Study of Apocalyptic and Jewish Sectarian Teachings* (Nov Test, Supp. vol. 35, Leiden: E. J. Brill, 1973), pp. 172—178; B. Reicke, "The Law and This World according to Paul. Some thoughts concerning Gal. 4, 1—11," *Journal of Biblical Literature*, 70, 1951, pp. 259—276. <sup>カウツ</sup> H. D. Betz, "Geist, Freiheit und Gesetz. Die Botschaft des Paulus an die Gemeinden in Galatien", *Zeitschrift für Theologie und Kirche*, 71, 1974, S. 84. <sup>も</sup>参照。ただ「この種の解釈を否定する説もないわけではな<sup>い</sup>」。G. Dellling, "σροxyσω, κτλ.", *TDNT*, vol. 7, pp. 666—687, esp. 684.
- (32) 一九八一年一〇月に開催された日本宗教学会第四〇回学術大会で行なった研究発表では、この強引な推論に基づいた部分があったので、ここで訂正しておきたい。
- (33) 佐竹明「前掲書」五一四—五二七ページ参照。
- (34) *πάθημα* と *ἐπιθυμία*。佐竹も指摘する通り、前者は受動性を、後者は能動性をそれぞれ示すであろう。そこで、ここでは内容的な判断から「あらゆる欲」と解した。佐竹明「前掲書」五四八—五五七ページ参照。

- (35) シュリーアは、六・一を五・二五の「靈に導かれる通り歩く」ことの新しい例と解す。cf. H. Schlier, a. a. O., S. 270. ヘッツは、「靈的な者」としてこのキリスト者の自己理解を見出す。cf. H. D. Betz, *A Commentary on Paul's Letter to the Churches in Galatia*, p. 297.
- (36) R. Bullmann, *Theologie des Neuen Testaments*, 7. Aufl. (UTB 630, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1977), S. 336. 川端純四郎訳『新約聖書神学』II、新教出版社、昭和五五(四一)年、二二四ページ。
- (37) 敢えてこのような回りくどい言い方をしたが、グノーシスの核になる思想の定義については、柴田有『グノーシスと古代宇宙論』勁草書房、昭和五七年、を見よ。